



激し、お嬢吉三の臺辭ではないが「利かぬ芥子と悪黨に凄味のねえのは馬鹿氣なもの」と痛快がつてゐた私は、今だにこれら不逞の輩の臺辭をところどころ覺えてゐる。よくよく出世に向かない心柄の男である。

帝劇が出来たために、暫く羽左と梅幸が舞臺の上で夫婦別れを餘儀なくされ、多くの芝居好きを失望させてゐたのが、また兩人共演の機が熟した先驅として、横濱座で何年ぶりの顔合せに「十六夜清心」を出したとき、當時大學生だった私は學校を休んで横濱まで駆けつけたものだ。そして大寺庄兵衛の住居へゆすりにゆく花道の出で、梅幸のお小夜が、いずれもさまえ久方ぶりのお目見えに、こんなボロを下げたようなナリは氣まきが悪い、といふ捨臺辭に答へて羽左の清吉が「どうしてどうして、おめえは何時見ても若くて美しいわなあ」そこで梅幸「ホ、暫く逢はないうちに、お前さんはマア大層お世辭がよくおなりだね」とたんに大向ふから「ヨイショ」と半疊がはいつたの受けて「そりやあ、おれだつて『ヨイショ』だが、さうして二人揃つて舞臺が勤められるのも、御ひいき様のお蔭といふものだ」と羽左さつそくの氣轉に、見物は唯もう譯もなく嬉しがつてしまつたが、私もまたその一人だつた。

最近十數年來、かつて好きだつた歌舞伎を見ても私は概して冷え切つた御馳走を食べるようなあじきなさを感じる。むかし私の生活のなかにキビキビと生きてゐたあの二番目狂言さへも、今や完全に過去の世界になり果てたのである。こういふ意味で、これからのジエネレーションに残すべき、そしてまた残るべき歌舞伎狂言が一體いくつあるだろう。豪華な傳統の夢も、ついに「御馳走のミイラ」に終るのではなからうか。飾棚のかはりに舞臺に付いた博物館の必要は今である。

片山總理への期待

坪内士行

文藝の興隆は、そのみちの天才の出現にかゝるとか、當時の一般民衆の文化レベルの向上によるとか云はれるが、私は理論はともかく、實際においてはその國、その土地、その時に、しつかりと政權を握る人の教養や趣味のいかに最も大きな原動力になると信じてゐる。昔と今とは違ふと云はば云へ、イ



ギリスでのエリザベス朝、ヴィクトリヤ朝、フランスのルキ十四世時代や、我國の奈良朝、元祿時代、さては明治中期の文運も、時節當來と云ふよりも、爲政者の文徳の然らしめたところである事は、武斷的な君主を戴いた國、土地では、せい／＼落首や諷刺文程度が行はれたに過ぎない事實に徴しても明らかではないか。

遠い昔や國の事はさておき、近く明治年間の文藝隆盛の現象は、上に明治大帝、皇后兩陛下の文をたしなまれた統治者あり、補佐し奉つた伊藤公亦、とかくの批難はあつたにしても、斷じて武斷派ではなく風流人であつたればこそと見てよい。その後繼者だつたと目される西園寺公も、一段と粹な趣味の人であつたと云ふ。それなればこそ、文藝方面だけに於いて見ても、道鷗紅露を始めとして、二葉亭、漱石等々の文豪續き生れたのである。伊藤、西園寺等が直接文藝を育てたとは云へないが、一般民衆の間に文藝愛好の雰圍氣をかもし出すにあづかつて大いなる力があつた事はいなまれない。

現在の片山内閣の政治力についての批判は全く別問題として、戰爭中は勿論のこと、戦後に於ても、總理大臣として、具體的に文藝方面の事に言及した人は、片山氏を除いては一人も無かつた一事にかん

がみて、私は同氏に非常な期待をかける者である。現に、これは日本有史以來初の光榮事であるが、今上陛下が、民間の一劇場文樂座に行幸せられた際、偶然か豫定の行動か、片山總理も當日同時にこれを見物してゐる。又、數日後の放送では、明らかに國立劇場建設についての抱負の一端をもらしてゐる。どちらも空前の事である。しかも其等の言動は、かの露伴博士の葬儀に列した態度と同様に、さか／＼一部の政治家がするような、プロバガンダめいたものではなく、同氏の眞實心から出た行ひであり言葉であると信するので、此の人にこそ、少くとも當分の間日本の最高爲政者としての責任をとらせ、文化運動の正しい音頭取りになつて貰ひたいと望まざるをえない。

とは云つても、私はもとより片山氏の文藝に對する趣味や教養の範圍や程度については、少しも知るところが無い。従つて、今まで能や歌舞伎や淨瑠璃をどれ位鑑賞されたか、又、文學其他の藝術についてのうんちくがどれ程であるかは知らない。が、私は、文化國家の最高爲政者は必らずしも最高文藝家である要はないと思ふし、かへつて一方にのみ深く徹した藝術家でない方がいゝと思つてゐる。總理大臣が第一流のピヤニストであると云ふ事は、その國



の誇には相違ないが、それであるから其の國のあらゆる文化が向上發展するとは限らないのである。私の望む最高爲政者の文化指導方針は、その人がカンリツク・テストを持つて、それ／＼の専門家の意見を偏頗なく受入れ、その是非の判断を誤らず、その間に、自らに一般國民に文化的雰圍氣をおういつさせると云ふ風のものでありたいのだ。今上陛下のお供をして文樂を見物する事その事は、あなたがち人形淨瑠璃を愛する事と一つではなし、文樂の太夫や人形遣ひが俄かに名人揃ひになつてしまふ原因にもならぬが、あゝした事によつて、文樂の存在さへ知らず、知つてゐても輕んじてゐた人々に、文樂尊ぶべしの氣持を起させるには相違ない。それでいゝ。

その徳がすでに廣大無邊である。即ち、我々はこれをやがて文樂愛護保存の運動にまで發展させるべき契機と考へるのが當然なのである。

文樂の愛護については、嘗て私がまだ大阪に住んだ頃にも、一つの協會が出来て、政府にも働きかけ若干金の補助を下附された事があつた。確かな金額は忘れたが、それがお話にもならぬ額であつた事はたしかである。私は、片山内閣が、そうした人を馬鹿にしたような方法ではなく、眞劍に、しかも早急に、文樂愛護の方法を講ずるであらう事を信じた。

でなければ、陛下供奉の意義も殆ど無くなるからである。同氏の云はれた國立劇場の建設は勿論結構だ。しかし、どの國でも、その國立劇場の効力が最大限度に發揮せられるのは、まつ先に、何人が見ても國の誇りとなるような演劇の媒介や保存にある事は誰でも知つてゐる。我が人形淨瑠璃劇に關しては松竹會社の感謝すべき永年の苦心によつて、幸ひにも文樂座が唯一の劇場として残存してゐる。文句は無用。直ちにあれを國立劇場又は國家保護の劇場の第一番としたらよいではないか。

あんな小さな、あんな特殊な、しかも大阪に在る物を國立劇場などとは、と云ふ説は必らず出よう。然らば問はん、である。大體國立劇場と云ふものを國立劇場を論ずる人は、どう云ふ形の劇場で、どう云ふ内容のもので、どう云ふ方法で經營されるべきものだと考へるのであらうか。その點、流石に片山氏は、その國立劇場に關する言葉の中で、上演曲目の名さへ三四あげられてゐたのは、無責任論でない證據で、嬉しく感じたのであつたが、アト・ランダムにあげられたであらう其の戯曲名は、いづれも外國の名篇のみであつた。それも一つの見識である。我々が現在「タイムス」や「リーダーズ・ダイジェスト」をむさぼり讀むのと同じ意味で、國家の管理



の下に、即ち、信賴すべき上演によつて、外國の名戲曲を鑑賞しうるとなつたならば、我々は何をおいても、必らずその劇場にはせ參するであらう。頗る結構である。が、萬一にも、そうした戯曲の演ぜられるであらう劇場で、歌舞伎や人形淨瑠璃劇が上演されていゝと思ふ人があつたら大間違ひだ。常識から云つても、いゝ建築はその外観からだけでも、必らず一つの藝術的性質を持つてゐる筈だ。まして舞臺機構のデリケートな部分々々や、觀客席のアトモスフィヤー等々は、そこに上演せられるべき演劇との調和をはかつた特殊なものでなければならぬ。あれもやれる、これもやれると云ふような劇場は、商賣人の儲け仕事の場合には許されるとしても、いやしくも「國立」の名を冠せられる劇場のなすべき事では斷じてない。私は、日本のような特殊な古典劇を豊富に持つてゐる國では、國立劇場は、最小限度四つは無ければならぬと思つてゐる。能樂のため、歌舞伎のため、人形淨瑠璃のため、そして、新時代又は西洋演劇のため、の四つ。それ等の一々について多少の愚見があるが、制約の紙數もあり、今はすべて略して、他日の機會を待つ事とする。

(八・二五)



金時

陣屋の梶原平次景高です。このかしらを寺子屋の春藤玄蕃や太功記の四方天但馬守にも用ひます多くは時代物の荒武者型の性根、文樂獨特のグロテスクない

いかしらでしたが戦災で焼失しました。(撮影・安原仙三氏)

十月の文樂座

第一部「菅原三段目」茶筌酒(七五三) 喧嘩場(隅若切腹(大隅) ▼「玉藻前三段目」(呂) ▼「壱坂」濱市内(濱、越名毎日替り) 山の段(松)

第二部「五條橋」牛若丸(濱、越名毎日替り) 辨慶(小住) ▼「千本櫻すしや」(住、綱) ▼「重の井子別れ」双六の段(伊達) 子別れ(山城少掾) ▼「初音の旅路」 靜御前(伊達) 忠信(綱)

十月十二日より十一月三日まで